

研究区分	教員特別研究推進 地域振興
------	---------------

研究テーマ	慢性腎臓病（CKD）の診断基準となる eGFR シスタチンおよび eGFR クレアチニンをパラメータとした定量的評価指標の検討				
研究組織	代表者	所属・職名	看護学部・教授	氏名	荒井 孝子
	研究分担者	所属・職名	経営情報学部・教授	氏名	東野 定律
		所属・職名	国際医療福祉大学・教授	氏名	天野 隆弘
		所属・職名	国際医療福祉大学・教授	氏名	武田 英孝
		所属・職名	国際医療福祉大学・教授	氏名	竹中 恒夫
		所属・職名	国際医療福祉大学・教授	氏名	池田 俊也
	発表者	所属・職名	看護学部・教授	氏名	荒井 孝子

講演題目	BMI・体脂肪率からみた人間ドックデータにおける eGFRcre と eGFRcys の乖離に関する検討
研究の目的、成果及び今後の展望	<p>【目的】人間ドックデータを用いて、血清クレアチニン値を用いた推算糸球体濾過量（eGFRcre）と血清シスタチンCを用いた推算糸球体濾過量（eGFRcys）の乖離の実際とその特徴について検討した。その結果、乖離が大きい群の特徴は若年者であること、既往歴の有病率が低いこと、検査データが正常であること、やせや標準体型などが示された。そこで今回は、BMI・体脂肪率より検討した。</p> <p>【方法】平成30年4月から令和3年3月までの期間にA施設でドック健診を受診したのべ70,446名のうち、シスタチンCのデータがある62,361例を対象とし、除外項目を除外した60,693例を対象として、BMIから「やせ群」、「標準群」、「肥満群」の3群に分類した。eGFRcre と eGFRcys の乖離の実際、乖離の特徴と各群との関連を調べた。3群間における eGFR 差（eGFRcys-eGFRcre）の平均値を比較するため、各群で一元配置分散分析を行い、多重比較（Bonferroni法）を行った。</p> <p>【結果】eGFR 差の分布より、eGFRcre と eGFRcys の数値に乖離（差）があることが示された。BMIの3群間で見ると、男女ともにやせ群から肥満群にかけて乖離は小さくなっており、40代の女性やせ群、次いで30代の女性やせ群、40代の女性標準群の順で乖離が大きくなっていった。体脂肪率の3群間では、18~39歳女性やせ群、次いで40~59歳女性やせ群、18~39歳女性標準群の順で乖離が大きくなっていった。</p> <p>【考察】以上より、やせ群で乖離が大きくなることが示され、乖離が大きくなる群の因子は、女性、若年であることが明らかとなった。よって、乖離が大きくなるとされるやせや標準体型、女性、若年ではeGFRの検査値を扱う際には対象によりeGFR値が乖離することを念頭に置く必要がある。今後は、乖離が大きくなる年齢群での両者の推算式の微調整が望まれる。</p>